

# おかげさまで7周年 なないろ



もはや生活に欠かせない情報誌となった「なないろ」は、9月に7周年を迎える。亜地市民、北社市民のために、おいしい情報、ためになる情報、感動の話、耳よりの情報などを発信する「なないろ」の魅力とは。(文・平岡宏枝)

## なないろ創刊当時は振り返り

平成25年9月、事務所であるコンテナに集まったのは、当時の社長ほか3人。その中には、編集部唯一の女性スタッフであった功刀さんもいた。「亜崎・北社地域では初めてのフリーペーパー」ということもあり、喜びの声が上がる反面、大丈夫？ やっていきけるの？ と、そのほとんどが心配の声でした。中には、「田舎だし店もないのにフリーペーパーなんて無理」「もって3ヶ月、それで終わるだろう」なんて声も、でも、地域の方で率先してラックを作ってくれる方や、人づたいに紹介してくれる方もいてくれたんです。創刊号のとき、巻頭で登場してくれた「のらごころ」さんが精力的に発信してくれたことは、今でも思い出です」と懐かしそうに語る。

「なないろ」とネーミングされたのは「亜崎・北社の人、街・暮らしと未来を多彩な情報でつなぐ、虹色」の架け橋に」という想いから。また、亜崎市の七里岩ラインと北社市のレインボーライン、この主要な道から、文字をいただいたという意味もある。その名に恥じないつもりで、は、やがて広まっていき、創刊して1年、やっと認知されるようになった。



### 個性あふれるスタッフ 和気あいあい

スタッフや社長の代わりを経て、定着してきた編集部。功刀さん以外の現スタッフは全員中途入社。そんな社会や他社の酸いも甘いも噛み分けてきた全員が口を揃えて「やりがいを感じる仕事」と答える。

「会社というのは制約があるかと思えますが、その制約の中で自由にできる。任せられているという良い意味でのプレッシャーと臨機応変に対応できる柔軟性、個々それぞれのキャラを活かしてくれる信頼性があります。得意不得意を補ってくれるのも嬉しくて、本当に居やすいと言っしかない不思議な会社です」(米倉)

「営業・取材・編集と大変な仕事ですが、方向性が一致していて、みんな同じゴールに向かって走っているチームワークの良さを感じます」(伊藤)

「少人数なので自分の意見が全員に届き、反映できる環境です」(大村)

「ただ、ミーティング中に盛り上がりすぎて社大企業になっってしまうときには、私が冷や水をかけています」(潮川)

誰かが困っていると別の誰かが必ず助けしてくれる。取材で手が足りないという自覚に気づけてくれるのもなないろの良さ、個人が携り深めた写真を集めると、とても誌面には載せきれないから、今度はLINEやInstagramを駆使して積極的にPRをしていく。

「皆この仕事に誇りを持っていて心から楽しんでいて。少しでも地域が良くなればという思いで業務以外の部分でも色々な媒体を使って情報を発信していきます」(功刀)



▲営業 米倉 (2016年7月入社)

## 今までの1冊田舎に残る唯一の存在



過去には印刷会社の締め切り日に入稿ができなかった苦い経験がある。ちょうど制作を完全に自社に切り替えたときで、知識も技量も経験も足りていな

「あめるときは、不慣れで長丁場になることを想定して早めに入稿に向けての作業を始めたのですが、締切日になってもどうにも終わらずに結局徹夜、それでも終わらず、外部の応援も受けてなんとか終わらせてもらったという感じでした。久々の徹夜のせいでしょうか、翌朝は寝起きまで両足が腫りました」(潮川)

今ではスムーズになった入稿作業だが、そんなときでも語り草になるほどのエピソードだそう。

「他にも思い出はたくさんありすぎて、話すには時間が足りません」(功刀)



▲制作 潮川 (2016年4月入社)



▲営業 大村 (2020年4月入社)

## 地域イベントが活躍の舞台

日々足を集めた情報を誌面に提供することだけでなく、イベントへの参加は、なるべく欠かさないという。特に、初めて主催した「KIZUNA FESTIV@L」のことに燃やしている。

清水社長曰く「私が就任してすぐに、功刀・米倉が5年を機に何かやりたい」と発したこと、開催されました。点のつながりを線にしたい。もっとこの地域を知ってほしいと考え、行政も巻き込んでカタチにしたイベントだと自負しています。このキズナフェスによって、さらに読者とクライアント、編集部をつなげることができた。「キズナフェス以外にも極力基幹・北社のイベントには顔を出さようとしています。誰かの何かの役に立つことができるし、むしろ僕の方が楽しんでます」(米倉)

「頭を出したら人手が足りなくて、スタッフとして手伝ったこともあります」(伊藤)

なないろは、本当の意味の「地域密着」であり、参加型のフリーペーパーということがわかる。「なないろ」に異動して来て間もないですが、担当ではないクライアントさんともスタッフの顔を知っていて、気さくに話しかけてくれたり、世代を超えてつながっている感じがここにはあります」(大村)



▲営業 伊藤 (2018年1月入社)

